

学位論文要旨

文末形式「トコロダ」の研究

— 体系的記述と使用動機 —

広島大学大学院 教育学研究科  
文化教育開発専攻 日本語教育学分野

学生番号 D150826 氏名 帖佐 幸樹

## I. 研究題目

文末形式「トコロダ」の研究  
－ 体系的記述と使用動機 －

## II. 論文構成(目次)

### 第1章 問題の所在

- 1.1 研究の動機と目的
- 1.2 本研究の対象
- 1.3 研究の構成

### 第2章 先行研究

- 2.1 先行研究の分類
- 2.2 構文の観点から見た「トコロダ」の先行研究
  - 2.2.1 新屋(1989)
  - 2.2.2 角田(1996・2011)
  - 2.2.3 川島(2016)
  - 2.2.4 2.2節のまとめ
- 2.3 意味・機能の観点から見た「トコロダ」の先行研究
  - 2.3.1 アスペクト形式としての「トコロダ」の先行研究
    - 2.3.1.1 日本語記述文法研究会(編)(2007)
    - 2.3.1.2 川越(1995)
  - 2.3.2 アスペクト形式とは見ない「トコロダ」の先行研究
    - 2.3.2.1 寺村(1984)
    - 2.3.2.2 川越(1989)
  - 2.3.3 特異な「トコロダ」の用法に関する先行研究
    - 2.3.3.1 寺村(1978b)
    - 2.3.3.2 田中(1996)
    - 2.3.3.3 小林(2001)
  - 2.3.4 2.3節のまとめ
- 2.4 日本語の文法指導書に見られる「トコロダ」の説明
  - 2.4.1 グループ・ジャマシイ(編)(1998)
  - 2.4.2 庵他(2001)

- 2.4.3 市川(2005)
- 2.4.4 中俣(2014)
- 2.4.5 2.4 節のまとめ

## 2.5 研究課題の設定

# 第3章 トコロダ文で発話するのはどのような人物か

## 3.1 問題提起

## 3.2 トコロダ文を発話する人物の特徴

- 3.2.1 当事者としての発話者
- 3.2.2 「トコロダ」と発話者の在り方との関係性

## 3.3 発話者はどのような場合に当事者となるのか

- 3.3.1 職務上の責務から当事者となる場合
- 3.3.2 自分のこととして臨むことで当事者となる場合

## 3.4 トコロダ文による発話とはどのような発話か

## 3.5 第3章のまとめ

# 第4章 変化を述べる際のタトコロダ文について

## 4.1 問題提起

## 4.2 変化を「シタ」で述べる発話をめぐって

- 4.2.1 井上(2001)
- 4.2.2 定延(2016)
- 4.2.3 帖佐・白川(2016)

## 4.3 変化を「シタ」で述べることと当事者との関係性

## 4.4 「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」—帖佐(2018)再考—

- 4.4.1 帖佐(2018)の概要
- 4.4.2 トコロダ文の「文のタイプ」について
- 4.4.3 発話者の在り方から見た「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の使い分け

## 4.5 第4章のまとめ

# 第5章 主体の推量判断の関わるトコロダ文について

## 5.1 問題提起

## 5.2 対象とするトコロダ文の特徴

- 5.2.1 タイプ①「Aか(Bか)トコロダ」構文
- 5.2.2 タイプ②「PトコロダガQ」構文
- 5.2.3 タイプ③「タイトコロダ」構文

## 5.3 トコロダ文の体系

- 5.3.1 トコロダ文の2つの類型
- 5.3.2 トコロダ文の文脈依存度について
- 5.3.3 2つのところダ文の連続性

#### 5.4 第5章のまとめ

### 第6章 終章

#### 6.1 本研究のまとめと意義

#### 6.2 本研究で残された課題

- 6.2.1 「当事者として動静を発話する人物」という特徴の出处
- 6.2.2 「テイタところダ」について
- 6.2.3 「タバカリダ」との関係性
- 6.2.4 「推量判断実践」型ところダの使用実態について

#### 6.3 日本語教育への示唆

- 6.3.1 ところダ文と使用文脈
- 6.3.2 費用対効果から見たところダ文
- 6.3.3 「みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版」におけるところダ文

#### 6.4 今後の展望

- 6.4.1 「ところダ」と類義表現との関わり
- 6.4.2 文(法)論における「ところダ」の位置づけ
- 6.4.3 言語コミュニケーション研究とところダ文

#### <参考文献>

#### 付録

#### 付録1 トコロダ文用例データ

#### 付録2 調査結果報告書

### Ⅲ. 論文要旨

#### 第1章 問題の所在

文末形式「トコロダ」は、「トコロ」が「ダ」の類を伴って文末助動詞化したもの(寺村 1978b = 1992 : 335)とされており、金田一(1955)以降、アスペクトを表す形式の1つとして扱われることが多い。また、日本語教育においても、アスペクトを表す形式の1つとして、初級の項目として扱われている。

しかしながら、学習者においては「トコロダ」が実際の運用に結びついていない現状が窺える。例えば、市川(2005 : 233)では、「トコロダ」に関して学習者からよく出る質問として「「ところだ」の使い方がよくわからないので、実際の会話でほとんど使えない」との報告がなされている。このことは、「トコロダ」という形式がどのような場合に使用される形式であるのかということについて、よくわかっていないという現状を示しているのではないだろうか。

上記のような問題意識に立ち、本研究では文末形式「トコロダ」は、その運用をするにあたって、どのような知識(運用に関する規則)が必要になってくるのか、実際の運用に繋げることを視野に入れた記述を試みる。

#### 第2章 先行研究

この章では、先行研究を「構文の観点から見た「トコロダ」の先行研究」、「意味・機能の観点から見た「トコロダ」の先行研究」、そして「日本語の文法指導書に見られる「トコロダ」の説明」の3つの観点に分類し、検討を行った。

その結果、トコロダ文の構文的な特徴や、「トコロダ」の意味・機能、そして、用法の種類についてはある程度明らかになっていることが分かった。また、その使用実態に関しても、先行研究で特異とされてきた「トコロダ」の用法を除けば、川越(1989)によって概ね明らかにされている。

その一方で、トコロダ文の使用条件、及び、文脈(場面)との関わりといった語用論的な側面については、用語による特徴付けがなされているのみで、その詳細については十分に明らかになっていないのが現状である。また、「トコロダ」の用法には、先行研究において等閑視されてきた用法もあり、それらの用法が体系の中にどのように位置づけられるのかという課題も残っている。

以上を踏まえ、本研究では、文末形式「トコロダ」を運用に繋げていくためには、まず、トコロダ文の語用論的な側面について明らかにする必要があると考え、以下の研究課題を設定する。

#### ○研究課題

課題① 「トコロダ」について、トコロダ文を発話するのはどのような人物なのか。

また、それは「トコロダ」の意味・機能とどのように関わるのか。(第3章)

課題② 課題①で明らかになったことと、「トコロダ」に前接するアスペクト形式との間には  
連関があるのか。あるとすればどのように関わるのか。(第4章)

課題③ ‘普通’の「トコロダ」の用法と特異とされてきた「トコロダ」の用法の間にはどのよ  
うな連続性が認められるのか、また、特異とされてきた「トコロダ」の用法は「トコ  
ロダ文の体系の中にどのように位置づけられるのか。(第5章)

### 第3章 トコロダ文で発話するのはどのような人物か

トコロダ文による発話の自然さは、その場における発話者の在り方によって異なる。例えば、  
次の(3.1)と(3.2)は同じような状況であるが、(3.1)において、保育士の発話としては(3.1a)に加え、  
(3.1b)も自然であると判定する日本語母語話者は少なくない。それに対し、(3.2)において、庭師  
の発話としては(3.2a)のみが自然であると判定する日本語母語話者が多い。

(3.1) [母親は保育園まで息子のひろしを迎えにきたが、ひろしの姿がない。そこに、  
ひろしの担当の先生があらわれたため、ひろしを知らないかたずねてみた。]  
母親：「あのう、ひろしを見ませんでしたか。」

保育士：a. 「ああ、ひろしくんなら向こうで片づけをしていますよ。」

b. 「ああ、ひろしくんなら向こうで片づけをしてるところですよ。」

(3.2) [母親は保育園まで息子のひろしを迎えにきたが、ひろしの姿がない。そこで、  
たまたま近くにいた庭師のおじさんに、ひろしを知らないかたずねてみた。]  
母親：「あのう、赤い帽子をかぶった男の子を見ませんでしたか。」

庭師：a. 「ああ、その子なら向こうで片づけをしてるよ。」

b. 「?ああ、その子なら向こうで片づけをしてるところだよ。」

この点について、本研究では、(3.1)と(3.2)の違いは、発話者がどのような立場でその場の把握  
に臨んでいるかの違いから説明できると考える。

具体的には、(3.1)において、発話者である「保育士」は、その職務上の責務から、園児を含め  
て、園内で起こっていることに目を配っておく必要がある。その一方で、(3.2)において、発話者  
である「庭師のおじさん」は、たまたま園内の庭の手入れに来ていたのであって、「保育士」のよ  
うに、園内で起こっていることに目を配っておく必要があるわけではない。この違いは、その場  
の把握に当事者として臨むか、あるいは部外者として居合わせただけかの違いであると言い換える  
こともできる。

以上を踏まえ、本研究では、トコロダ文による発話において最も重要なのは、(3.1)の「保育士」のように、その場において発話者が当事者として事の成り行きの把握に臨むことではないか、と考え、以下の(3.3)を提案した。

(3.3) トコロダ文を発話する発話者は「当事者として動静を把握する人物」という特徴を持つ。

次に、コーパスから収集した実例の観察の結果、発話者が「当事者として動静を把握する人物」となる場合として、次の(3.4)のように「職務上の責務を負う」場合と、(3.5)のように「その場で話題になっている事柄に対し、自分のこととして臨む」場合の2つの類型が確認された。

(3.4) 「現在までに、心臓及び胃の解剖を了えました。なお、小腸の切開が進行中であります。

胃の中に残存しておりましたものの科学的分析も、九分通り終わったところです。」

(「解剖結果」 笹沢左保)

(3.5) 「わたし、ご息子のルイスくんを存じていましてね」「ほう」と父は答えた。「あいつなら今サンタモニカにいてるところだ」スタントンはサンタモニカがなんのことかも知らないようだった。

(「あなたをつくります」 フィリップ・K・ディック(著)/佐藤龍雄(訳))

(3.4)では、発話者は遺体の解剖を担当した「監察医」である。ここで、トコロダ文の主格になっている「科学的分析」は「監察医」の手によって行われるものであるという点で、発話者が請け負ったものという特徴がある。

その一方で(3.5)において、発話者は話題の人物に対し、職務上の責務を負っているわけではない。ここで、発話者は(3.5)では話題の人物(ルイス)の「父」という立場にあるが、この際、発話者はその場において他人として居合わせているのではない。そうではなく、発話者は話題の人物の「親族」であるという立場を通じて、その場で話題になっている事柄に対し、自分のこととして臨んでいる。この発話者による事柄への主体的な姿勢が特徴として見出される。

#### 第4章 変化を述べる際のタトコロダ文について

第4章では、「ルトコロダ」「テイルトコロダ」「タトコロダ」「テイタトコロダ」といった、「トコロダ」と前接するアスペクト形式との関わりについて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「文学」ジャンルから収集したトコロダ文の用例182件を観察した。

表 4-1 文末形式「トコロダ」の用法の内訳

用法	タトコロダ	テイルトコロダ	ルトコロダ	テイタトコロダ	合計
件数	55件(30%)	47件(26%)	28件(15%)	52件(29%)	182件

表 4-2 文末形式「トコロダ」の用法の内訳(主格が発話者と一致する場合)

用法	タトコロダ	テイルトコロダ	ルトコロダ	テイタトコロダ	合計
件数	36件(24%)	41件(27%)	23件(15%)	52件(34%)	152件

表 4-3 文末形式「トコロダ」の用法の内訳(主格が発話者以外の場合)

用法	タトコロダ	テイルトコロダ	ルトコロダ	テイタトコロダ	合計
件数	19件(63%)	6件(20%)	5件(17%)	0件(0%)	30件

その結果、「テイルトコロダ」と「ルトコロダ」の出現頻度は主格と発話者が一致しているかどうかの影響されていないのに対し、「タトコロダ」と「テイタトコロダ」の出現頻度は、主格と発話者が一致しているかどうかの影響されていることが明らかになった。

次に、考察の対象を「変化動詞」＋「タトコロダ」の場合に絞って考察を行った。

変化を「シタ」で述べる際の発話者の在り方については、井上(2001: 107)において、「シタ」を用いるためには、出来事が実現された経過(少なくともその一端)を具体的な形で把握していなければならない」と指摘されている。

一方で、トコロダ文においては、発話者が「当事者として動静を把握する人物」となる場合の1つとして、「その場で話題になっている事柄に対し自分のこととして臨んでいる場合」があった。

これを、変化を「シタ」で述べる際の状況に当てはめてみると、発話者は、ある状態から別の状態への経過(遷移)を具体的な形で把握するという形で、結果的にその場で話題になっている事柄に対し自分のこととして臨んでいることになっている。つまり、変化を「シタ」で述べる際、発話者は出来事が実現された経過の具体的な把握を経ることによって、結果的に「当事者として動静を把握する人物」となっていると考えられる。

- (4.1) 「ウナーヴェン市まではどのくらいかかりますか？」ティウリがきいた。「2日半だ。」  
 ヴェルミンが答えた。「それで、いま何時ですか？」「12時が過ぎたところですよ。」  
 宿の主人が答えた。(『王への手紙 下巻』トンケ・ドラフト(著)/西村 由美(訳))

例えば、(4.1)では、「いま何時か」という話題に対し、宿の主人は「12時を過ぎる」という変化を「過ぎた」と「シタ」で述べることで、宿の主人は時間の変化を具体的な形で把握している。



これにより、その場で話題になっている事柄に対し自分のこととして臨んでいることになるため、結果的に「当事者として動静を把握する人物」となり、トコロダ文での発話が可能となっている。

この点を踏まえると、1人称主格以外のトコロダ文の用法において、「タトコロダ」の用法の出現数が最も多いことについては、変化を「シタ」で述べる場合には、発話者は、結果的に「当事者として動静を把握する人物」となっている点が関わっているのだと考えられる。

## 第5章 主体の推量判断の関わるトコロダ文について

第5章では、先行研究で特異とされてきた「トコロダ」の用法について、田野村(1990)における、「推量判断実践文」と「知識表明文」の議論をトコロダ文に援用し、次の(5.1)～(5.3)のように、「ダ」を「ダロウ」に言い換えても不自然ではないものを「推量判断実践」型トコロダ文、(5.4)～(5.6)のように「ダ」を「ダロウ」で言い換えると不自然なものを「知識表明」型トコロダ文として位置づけを行った。

- (5.1) 借り手市場の賃貸物件もあり、買うか借りるか迷うところ{だ/だろウ}。  
(『朝日新聞』2011.3.14 記事 一部改変)
- (5.2) 普通ならダービーに向かうところ{だ/だろウ}が、横山の助言もあって、このNHKマイルカップを選んだ。  
(『朝日新聞』2015.5.11 記事 一部改変)
- (5.3) 五輪の出場枠は各種目とも1カ国で最大2なので、1つでもポイントを稼いで順位を上げたいところ{だ/だろウ}。  
(『朝日新聞』2015.12.11 記事 一部改変)
- (5.4) 万能細胞から健康な体のさまざまな組織や臓器をつくれば、病気を治すのに役立つ。iPS細胞では、実際に病気の人に移植して、効果があるか、安全かどうかを確かめる研究がもうすぐ始まるところ{だ/??だろウ}。(『朝日新聞』2014.2.15 記事 一部改変)
- (5.5) 原発が減ると、原発に支えられてきた地域の仕事が減ることも考えられる。原発があることで自治体が国からもらえるお金や、電力会社が支払う税金も減る。国はお金を出すなどして自治体を助けられないか、考えているところ{だ/??だろウ}。  
(『朝日新聞』2015.4.11 記事 一部改変)
- (5.6) 地元の郷土史家らでつくる横須賀開国史研究会の山本詔一会長も「編さんして終わりではなく、ようやく横須賀の近代史を語る基礎となる資料が集まったところ{だ/??だろ

う}。市は対応する体制をつくるべきだ」と語る。

(『朝日新聞』2016.7.9 記事 一部改変)

第3章と第4章で議論した「トコロダ」の用法は、「知識表明」型トコロダ文に、先行研究において特異とされてきた「トコロダ」の用法は「推量判断実践」型トコロダ文に該当する。

「知識表明」型トコロダ文と「推量判断実践」型トコロダ文の違いについては、「ダ」を「ダロウ」に言い換え可能かといった形式的な特徴以外には、事態の性質や、前節する動詞の形態、そして文脈依存度という点でも違いが認められる。

表5-1 トコロダ文の種類とその特徴

	「知識表明」型トコロダ文	「推量判断実践」型トコロダ文
「トコロダ」の意味	当事者として発話時現在の状態を述べる	当事者として推量判断をくだす
事態の性質	現実における事態	非現実における事態
動詞の形態	制限なし	ル形, タイに偏る
文脈依存度	低い	高い

また、「知識表明」型トコロダ文と「推量判断実践」型トコロダ文の共通点としては、次の(5.7)のような「主題－解説」型の情報構造を共有する点を挙げることができる。

(5.7) 主題〈当事者である私の把握では〉－ 解説[(Xハ) ……………]トコロダ。

「知識表明文」としてのトコロダ文では、発話時現在の状態が「当事者として動静を把握する人物」によって述べられるものであるのに対して、「推量判断実践文」としてのトコロダ文は、当該の人物によって推量判断がくだされるものであると考えられる。

## 第6章 終章

本研究の結論としては、文末形式「トコロダ」の語用論的な側面として、トコロダ文を発話する発話者は「当事者として動静を把握する人物」という特徴を持つことを明らかにした。

しかしながら、「当事者として動静を把握する人物」という発話者の特徴の出处や、「テイタトコロダ」がなぜ一人称主格のトコロダ文にしか確認されなかったのかという問題、そして、「推量判断実践」型トコロダ文の使用実態の検討が今後の課題として残っている。

日本語教育への示唆としては、「トコロダ」はアスペクト形式として初級の項目として位置づ

けられている場合があるものの、本研究が明らかにした語用論的な側面を踏まえると、特に一人称主格以外のトコロダ文については、初級以降に別途位置づけが必要だと考える。

また、今後の展望としては、まず「タトコロダ」と「タバカリダ」の使い分けの問題や、「状況だ」、「段階だ」のような類義表現との関わりを深めることが挙げられる。また、文法論における「トコロダ」の位置づけや、コミュニケーション論との接点を探ることが期待される。

### 〈主要参考文献〉

- 市川保子(2005)『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク。
- 井上優(2001)「現代日本語の「タ」—主文末の「タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム(編)『「た」の言語学』pp.97-163, ひつじ書房。
- 神尾昭雄(1985)「談話における視点」『日本語学』14, pp.10-21, 明治書院。
- 川越菜穂子(1989)「トコロダ文の意味と構造—情報のなわばりとの関連で—」『大阪大学日本学報』8, pp.61-78, 大阪大学文学部日本学研究室。
- 金田一春彦(1955)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X(文学), 4, pp. 63-90(『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 1976 所収)。
- 定延利之(2016)『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房。
- 田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』pp.785-795, 三省堂。
- 帖佐幸樹(2018)「「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の使い分け」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部(文化教育開発関連領域)』67, pp.231-239, 広島大学大学院教育学研究科。
- 帖佐幸樹(採択済)「トコロダ文で発話するのはどのような人物か」『国文学攷』247, pp.(1)-(15), 広島大学国語国文学会。
- 寺村秀夫(1978a)「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」『日本語・日本文化』7, pp.1-24, 大阪外国語大学研究留学生別科(寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』に所収)。
- 寺村秀夫(1978b)「「トコロ」の意味と機能」『語文』34, pp.10-19, 大阪大学。
- 寺村秀夫(1984)『日本語とシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
- 寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集Ⅰ—日本語文法編—』くろしお出版。